

## シベリア抑留記

千葉県 林 興 一

### 一 敗戦前夜

突如非常呼集の号令で整列した。教官が抜刀して「お前らよく聞け！ アメリカのルーズベルトも死んだ、戦局は更に激しさを増す。この秋に当たり一死奉公は目前にある。直ちに原隊に復帰せよ」

昭和二十年八月、満州チチハルの幹部候補生集合教育隊の午前二時のことである。私の本隊は当時、興安嶺の陣地に配置され、不気味な沈黙を漂わせており、武装謀者の跳梁をほしのままにしており、帝国陸軍の面影は今いずこという状態であった。八月十四日前後から、撤退する将兵は無残な姿で形容し難い敗残兵そのものである。それを再編成して、「急造爆雷」を一個ずつ配布され、息つく暇なく肉弾攻撃に消え去っていった。

### 二 地獄さながらのブハト駅頭

ちょうどその時私は連隊本部にいて「戦友と共に出陣し護国の華と散りたい」と申し出たところ、副官に「林、そんなに死を急ぐことはない」と怒鳴られ、この指揮班に残れと命令された。そして翌々日、連隊長が敗戦の報を公表した。直ちに軍旗を焼却し、軍馬を放ち幕舎に火を放ったが、軍馬は立ち去ろうとせず我々を遠くから慕っているようであった。「すべて整理して、速やかに興安陣地を下りてブハト駅に集結乗車せよ」という命令であった。

ブハト駅構内は、満州国から最後の邦人引揚列車が鈴なりに停車している。我々の列車と並列であった。そのために、現地召集された主人を呼ぶ声、また兵隊の方から子供、妻を捜し求める声、邦人列車の中でお産があったようで医者を呼ぶ声、ソ連戦車の急進を背後に阿鼻叫喚、さながら地獄絵図である。「兵隊の馬鹿野郎、何で敗けた」そんな罵声を耳にしながらチチハルへ集合させられた。

ある日、週番士官に呼び出しを受けロシア語を知っ

ているかと尋ねられた。全然知らないと言えるところ、ロシア語のアルファベットを示され、これで二千人の名簿を作ってくれと依頼され、部屋へ通された。五人いたので、四百人ずつである。書き終わったのが午前二時頃であった。

朝、営庭に出ると小銃、機関銃、軍刀の山である。あたかも薪か粗朶そだのように、敗戦の惨めさ、実に無情である。行き交う者寂として声なく武装解除が行われていった。また呼び出され、名簿の作成に没頭した。

その頃、スコーラダモイの合言葉で二千人ずつどこともなく出発して行った。先発隊は大連へ着いた等々の話で持ち切りである。我々はいつ出発か、気になって夜も眠れない。しかし真実か否か半信半疑である。真実ならば一日でも一刻でも早く、心は帰心矢の如しであった。

### 三 シベリアへ

ようやく我々にも出発の時が来た。早々部隊の編成である。その頃一列車二千人の編成であった。乗車して、行方は北か南か、それが気がかりで全員神経を研

ぎ澄まして発車のベルを聞き、汽車の進行方向も心の中で南進を祈りつづけた。しかし我々の期待も空しく汽笛一声北進を始めた。どの顔も蒼白となり、言葉を発する者もなくうつろな眼、眼、眼である。沈黙を破ってこんな歌を誰か口ずさんでいる。「あんなになつて、そんなになつて、こんなになつたよー。ねえねえ、愛して頂戴よ」。皆、自分自身に強いて心に冷静を期しているように思えた。痛恨の兵士を乗せた列車はひた走り、満洲里に着いた。

騒音に目を覚ますと列車が停まっている。車外を覗き見しようと思えど窓は二つ、ハスキーな男の声、女の声入り乱れて騒々しい。ソ連兵の掠奪が始まったらしい。当時、武装解除されたが私物はすべて許可されて持っていた。時計、眼鏡、タオル、靴下、セーター、チョッキ、国旗、万年筆等々。車両順に押し寄せて来る様子である。全然理解できないロシア語でまくしたて、銃口を向けて威嚇し掠奪するという状況連絡がきた直後であった。

外から針金を解く音が身体中を走る。「ヤボン出て

来い」銃口が不気味に光る。最強を誇った関東軍も丸腰では形なしである。車中の仲間はどうやけっぱちである。「勝手にしやがれ、大馬鹿野郎、泥棒野郎」日本語で言っても連中には分からない。またロシア語で言っても日本軍には分からない。業を煮やしソ連兵は車中に突入し、手当たり次第入口近くの装具を引きずり下ろして退散していった。外から針金をからめる音が五体に空しく響いた。やっと正気に戻った二、三の仲間が苦心して車両の上部に取り付けられた窓をこじ開けて微かに外を見た。(たしか関口軍曹(横浜市出身)だったと思う)とたんに号泣し始めた。何かと尋ねても無言である。妙なもので、人間心理として興味が湧いて秘かに望見すれば、これ如何に、野次馬に集まった女性の頭に日本の国旗が、しかも神かけて武運長久を祈った祖国の親、兄弟、姉妹の寄せ書きのある日の丸がスカートとして使われている。無性に悔やしさがこみあげてくる。異様な雰囲気、次々かわりばんこにそれを見て泣いた。車中の干し草もその涙で濡れに濡れた。だいぶ時間が経過したと思う、ソ連の特

異性か。出発か、下車か、一寸先は真ッ暗であった。

車内は、牛馬を輸送する貨車を上下二段に仕切り、干し草を敷き六十人のぎゅうぎゅう詰めである。だんだん口数が少なくなる。更に列車は北進し、一日一食の粥で屠場に送られる牛馬さながらである。ちょうど三日目、十月八日、下車の命令で外に出た時、皆フラフラであった。荒寥たるシベリア、白雪皚々、肌に突きささる寒気は生まれて初めての経験であった。

人口十七万くらいのウランウデという町が近いそうで、ここがこの地区の収容所本部であった。四メートルもある丸太で四方を囲んで、四隅に望楼が建っている。それは我々の逃亡を監視するためと狼の警戒だそう。これから始まる極北の試験に耐えられるか、生か死か、暗然たるのも私一人ではなく、皆、疲労困憊の極限であった。戦友の顔を見ても髭ぼうぼう、肌はうす黒く、眼光鋭く、枯れ木のまさに倒れんとする寸前のようであった。

#### 四 作業隊編成と朝夕の点呼

ようやく一日二食の高梁粥(かけ盒に一杯)にあり

つけるようになって一週間、五百人単位でどこともなく出発して行く。送る者送られる者、ひたすら黙々と声が出ない。泣いてくれるなシベリア鳥、古参兵の語るところによれば「昭和十六年に関東軍特別大演習、略して関特演である。その時満洲里の手前ハイラルに、当時世界に誇る地下陣地を構築（一個部隊列車ごと入り、二カ月籠城出来る）。工事完成の折、地元の苦力をハイラル河で処刑し秘密を守った」と。故にソ連の軍事施設建設につけば命は「神のみぞ知る」である。そんな話で毎日が過ぎた。

人員点呼は愉快であった。我々は整列する時には四列側面縦隊あるいは二列横隊であったが、彼らは四列、二列では人員の掌握がどうしても出来ない。五列か十列であった。加減乗除が苦手のようで、五、十、十五、二十と数え、端数が出ると長い時間がかかり、寒い中で閉口した。そのうちタバコを持って行くようになったが、これは全ての収容所であったようである。

在満の鉄道連隊、工兵隊、歩兵、通信の混成で、い

よいよ我々も前川利一大尉（神戸市出身）を隊長として行くて定めぬ行軍が始まった。ソ連は全く秘密主義で、先導将校も行く先は知らんと言う。毎日毎日の糧秣が自動車で届けられ、そのときに行程が示されるという。しかし時間的に見ても一日約四十キロくらいである。一時間行軍して十五分休憩、ところかまわずごろごろり乞食同様、昔の規律はどこへやら。生とは、死とは、頭の中は混乱衰弱、朦朧として斃る者続出、極度のホームシック等々、平常を保つ戦友は数少なく、心は減入るばかりであった。

「冬の陽をまともに浴びて行く道の果てさえ知らず、シベリアの奥深くたどり行く、ああ、一千里」「常磐の松の緑濃き秀麗の国秋津島守らで止まじ身を捨てて」と思えども、敗戦後の今日、自分の命の存在は、その意味は、しかし戦場に散った戦友は……、いっしか真つ白な雪の中でついうとうと。ソ連の警戒兵は十六ー十八歳ぐらいであったが、その少年兵が銃でダワイダワイとこづいて起こした。粟粥一杯ズルッと飲んでまた行軍であった。

五日目の朝だったと思う。極度のホームシックにより逃亡者が二人出た。その日の行軍は中止で、全員整列させられ、ソ連将校から威嚇された。

一、逃亡した二人は発見次第銃殺する。

二、再度逃亡者が出たときは、その日本の指揮官を銃殺する。

また、当地で逃亡しても最後まで成就出来ないものと心得よ、厳寒と飢えと狼の餌食である、とのことであった。

旧式の飛行機が遠く近く旋回を始めた。ちょうど午後三時頃であった。発見されて我々の眼前に連行され、儀式が始まった。二人に鍬と円匙を渡し「自ら墓穴を掘れ、銃殺する」と申し渡した。一同よく見ておくようにと居丈高である。逃亡者にはそれなりの理由があるだろう。命永らえたい。犬死にしたくない。故郷を思うあまり、父母兄弟を思う熱情からであろう、ここで銃殺では無くなってしまふ。最後の最後まで、一瞬でも長くと、等しく考えているに相違ない。

前川大隊長がソ連将校に助命を申し出た。本人も駆

け寄り泣訴嘆願する。この厳しいシベリアで存命は絶対不可能であることも判断出来ぬほど兵は疲労困憊しておるので穏便にと嘆願した。ソ連将校は顔を真っ赤にして激怒して逃亡者を蹴飛ばした。兵は二度三度ソ連将校の足にかじりつき哀願を重ねたが、遂に判決は下った。二人は涙を流しながら一鍬一鍬と深く土を掘り起こし続けた。ようやく薄暮が近づいた頃、墓穴が出来た。

「全員整列せよ、二人に目隠し」と命令が出た。二人とも狂乱している。我々も初体験である。チェコ製三十六連発の自動小銃を持った警備兵が一列に對峙し、緊張の一瞬であったが、我々は何をなすべきか、体力、気力、知性を奮い起こして行動しなければ、戦友を犬死にさせてはいけない、どよめきが湧き立った。前川大隊長が二歩三歩歩み寄った。ソ連将校にロシア語で「私の責任において再度このようなことは絶対に起こさない」と。長い長い沈黙が続いた。「前川キャピタン、ハラショ」と皆抱き合つて涙を流して喜んだ。(この頃、警戒兵と会話するのでロシア語の日

常語は少し理解出来た)

この事件があつてから絆は一層深まり、一蓮托生、十六日間の行軍で五百キロを踏破して、ようやくザルガレに到着した。

## 五 伐採作業

休む暇もなく明日から伐採作業と命令された。なるほど天然の松の大森林は平坦の地に無限に拡がっている。「これは飛行場かな」、不安なものがよぎる。バイカルを血で染めさせられるのではないかと皆思ったようであった。

作業班は六人で編成し、斧三、大鋸一、糸鋸一で、器材の損傷は営倉もしくは絶食であった。ハラシヨウウラポータ(成績の良い人)は早く東京ダモイであるという。そして「ノルマ」は一人ずつ四、五立方メートルで一組三十立方メートル、絶対遂行せよとの厳命であった。最初の頃は、原生林(松)は二十メートルくらいで杉の木のように枝も少なく真っ直ぐに伸びていて「ノルマ」も楽々クリアした。一線上に拡がって真正面に一直線に進む様は壯観というか豪快。それにも

増して東京ダモイ、何と魅力溢れる言葉だろう、自然と体力が漲るみなぎ思いである。早く完遂して「ダモイ」だ、五百人悉くそう思ったであらう。例え一日粟粥二杯でもがんばると。

それも束の間、一カ月もたたぬうちに「ノルマ」は五立方メートル、五・五立方メートルと繰り上げられ、最後は六・五立方メートルとなった。栄養失調という病気を聞いたのもこの頃である。夕べ故郷を偲んで話題に花を咲かせた戦友が朝には骸となり、毎朝一、二人は他界した。あるいは栄養失調なるがゆえに機敏に避けることが出来ず、木材の下敷きになって果てる者もあり、誠に残念至極であった。こんな世界が実存するのか。戦いに敗れたといえ、我々の思考の限界を超えた、全くわからない正に暗黒の世界であった。虫けら以下である、虫けらとて与えられた命を自由に愉しんで終わって逝くのに。どこまで、いつまで、神よ教え賜え、極北のオーロラに祈った。

きょうも摂氏マイナス五十三度、極北の空は鉛色に垂れ下がり、雪も降らない、重苦しさがいっぱいであ

る。「ノルマ」未遂のため休日は一切ない。足取りは重く、上を見るのも横を見るのも嫌である。口を大きくも嫌である。ただ足元を見つめ転ばないように、隊列からはみ出さないようにするだけで精いっぱいであった。隊列から逸脱すると死だからである。若いソ連兵は日本兵から見れば子供である。そのために列を乱すことに恐怖を覚えるようで、彼らは執拗に隊列を整えようとする。五列縦隊で五人が横一本の棒が進むように歩くと。平坦な土地ならいとやすいが、伐採した跡地に切株が至るところにある、そこを横一線、棒のようにとは不可能である。殊に、ほとんど栄養失調であるため十五センチも足が上がらない。無理というものである、防寒帽をかぶり防寒脚絆、防寒靴、それで粟粥一杯では。こんな無理がとうとうシベリアの地で血で染めてしまった。私の前々列六人が凶弾に斃れた。即死であった。

あまりの犠牲者続出のため、前川大隊長が、大詔奉戴日毎月八日家郷遙拝のとき、「諸君はノルマにとらわれずに、元氣な姿で故郷に帰り父母、兄弟姉妹にま

みえることが至上である。もって銘ずべし」と訓示があった。

当時、收容所の職員や警戒兵も作業量の低下、病人の多発、病死、作業死等により神経がピリピリしている中での訓示であったので、全員警備についていた。三十六連発の自動小銃の銃口が四カ所の望楼から不気味に向けられていた。無防備、しかも渾身の力を振り絞り生産活動に努力する我々は、断腸、痛恨の極みであった。前川隊長は兵隊に何を言ったかと收容所の詰問は厳しい。我々は動悸の高鳴るのを覚え、成り行きを見守った。微笑さえうかべ、おもむろに前川隊長は「近來病死、作業死が多いので、くれぐれも健康に留意するように在天の神に祈ったのだ」と話した。收容所長もにわかには破顔一笑、進み寄り「ハラショー前川」、握手で幕を閉じた。

しかし眞実は、地獄さながらの生活に、労働に自暴自棄の風潮が著しく、どうせこの世は一度の死、赤い夕陽の満州で散ったと思えばと、いまこそ收容所を襲撃し皆殺しにして溜飲を下げたい、一触即発のそんな

空気が漂っていた。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十三年一月二日

軍歴 昭和二十年三月一日 印旛郡佐倉町（現

佐倉市）東部第三六二部隊に入隊

満州国興安嶺に転出 同地で敗戦

入ソ年月日 昭和二十年十月八日

引揚年月日 昭和二十三年十月二十三日

在ソ期間 三年一カ月

収容地 ウランウデ

（千葉県 伊藤 千次）

私の昭和史（私と軍隊）

ホルモリン収容所

東京都 堀口 卓也

プロローグ

昭和十九年十一月、東部二十二部隊に現役兵として入隊した。兵科は騎兵であった。二十二部隊は歩兵部隊であるので、そこに駐在するのでなく直ちに戦地に赴くことは察せられたが、それがどの方面かは不明でもあり、果たしてこの時代に馬に乗る騎兵が存在するのか疑問であったが、営庭で革の長靴を支給されたとき、まだあるのだと確信した。騎兵第四旅団で、この旅団だけ終戦まで乗馬騎兵として活躍した。北支が派遣地であった。ここで初年兵教育を受け、百十七師団に転属して工兵となった。

関東軍

一九四一年、日ソ中立条約が締結され、関東軍は関